

【翻訳】1642年、デカルトからレギウス宛てられた3通の書簡

持 田 辰 郎

我々はすでに、1642年1月付のデカルトからレギウス宛の書簡を訳出した⁽¹⁾（以下「1月書簡」と略記する）。ここに訳出したものは、それに引き続く3通のレギウス宛書簡であり、その推定される日付をAT版、AM版における所在とともに示すならば⁽²⁾、

1642年2月末（AT-3: 528-529/AM-5: 153-155）

1642年3月（AT-3: 536-542/AM-5: 158-168）

1642年4月（AT-3: 558-560/AM-5: 186-188）

であり（以下、順に「2月書簡」等と略記する）、現存する限りではこの間のレギウス宛書簡のすべてである。ただし、異例の長さであった1月書簡とは異なり、さほど長いものではない。1月書簡と同様、本邦初訳である。

1月書簡以降、ユトレヒトの争いがどのように展開していくことになるのか、バイエに沿いつつ紹介しておこう⁽³⁾。

1月書簡において、デカルトは、一方でレギウスのためにヴォエティウス宛答弁文書の草稿をしたためつつも、その末尾では状況の変化を察知し、答弁を取りやめるよう、そしていずれもデカルトの友人であるユトレヒトの行政官ファンデル・ホルクやユトレヒト大学教授エミリウスの助言に従うよう勧告した⁽⁴⁾。

バイエによれば、ファンデル・ホルクはレギウスに対し、「デカルト氏が彼に忠告した慇懃さと穏やかさという手段」、すなわち1月書簡のような文書は「からかいと解される恐れがある」と指摘し、またエミリウスも「答弁を為すことは危険であり、嵐を静めるのに沈黙ほど適切なことは何もない」と判断した。だが、「これらの意見もレギウス氏の決心を変えはしなかった」のであり、彼は1月書簡をもとにした答弁の公刊に突き進む。バイエによれば「彼は2月2日にデカルト氏に手紙を書き、いかなる結末に至ろうと、それを修正し、デカルト氏が公刊しようと思う状態にして送り返してくれるよう懇願した」とあり、答弁公刊の前にもう一度やりとりがあったことになる⁽⁵⁾。そして「レギウス氏は、ついにエミリウス氏の同意をもぎとり、彼の答弁を印刷に付し、2月16日に刊行し、翌日以降2部をデカルト氏に送った。この書き物の題は次のとおりである。《神学的・哲学的系への補遺等々への答弁ないし覚書》」⁽⁶⁾。2月書簡冒頭にある「ヴォエティウスへの君の答弁」とはこの書のことであり、デカルトは比較的上機嫌でその評判について語っているが、もともと彼自身の1月書簡を下地とした文書なのである。

この答弁に対するヴォエティウスの対応は素早かった。「彼は大学の全体集会を召集し（欄外：2月18日と19日）、そこにおいて、この書は彼に対する、総長職の尊厳に対する、教授たちと大

学全体に対する同僚の一人による誹謗文であると訴え、その禁止を求めるため賛同者たちを行政官のもとに派遣した。行政官、すなわちファンデル・ホルクはヴォエティウスたちを「なだめるために、書店で当該書130部を差し押えさせた」。レギウスは3月5日、デカルトに事の次第を伝えたが、それに対する返書が3月書簡である。冒頭に「君が《真理のために迫害を甘受した》ことを祝福する」とあるのはこの差し押えと、付随して下された医学以外の授業の禁止をさす。

ただし、この差し押えはヴォエティウスにとって裏目となった。「その結果、残った冊子はきわめて珍しいものとなってしまい、この本はまことに珍しくまことに貴重なものであるかのごとく探し求められることとなった」のである。3月書簡でデカルトが「君の本の禁止がもたらしたことと言えば、ただいっそう熱心に求められ、いっそう入念に吟味され、いっそう多くの人びとに彼の不正と君の理由の良さが認められたことだけだった」と述べているところである⁽⁷⁾。

それゆえ、ヴォエティウスはさらなる強攻策をとる。彼は3月17日より再び大学の全体集会を招集し、「あらゆる正当な形式に反し、そこに大学全体の名において下されたかのように見える判決を持ち込んだ」。それは「彼が一人で作成したものであり、判事であると同時に弁護に召還も尋問もされなかったレギウス側をも兼ねての総長として宣告されたものであった」。この判決に賛同した教授は8名だけであったが、多くは態度を明らかにせず、明確に反対を表明したのはエミリウスと法学教授キプリアヌスの2名だけであった。レギウスは3月31日、デカルトに手紙を書き、「同月15日の行政官令、ここまで述べてきた教授たちの判決、そして父によってけしかえられたヴォエティウスの息子のテーゼを送った」⁽⁸⁾。これに対する返書が4月書簡である。

3書簡全体の趣旨は、闘争の渦中にいるレギウスを励ますことにある。レギウスは、制止を振り払って答弁を公刊したにもかかわらず、ヴォエティウス側の対応のたびに動揺をみせる。デカルトは、弟子の弱気にときにいらだちをみせながらも、激励を続けることとなる。

もっとも、デカルト自身の姿勢も一貫性にはほど遠いと言わざるをえない。さすがに弱気の発言はみられないが、闘いにおける戦術としては揺れ動いている。そもそも1月書簡における助言からして、慫慂に答弁するか沈黙を守るか、方針は明確ではなかった。2月書簡以降では、さすがに「頼むから、静かに笑っていてくれ」（4月書簡末尾）と今後の自重は促すものの、答弁したこと自体や状況に対する危惧はいっさいみられず、デカルト・レギウス側にとってきわめて楽観的な見通ししか語られない。しかも、その根拠といえば、ファンデル・ホルクたちに対する絶大な信頼と、「真理の力は偉大」（3月書簡・第6段落）という信念のみである。

実は、この後、「静かに笑って」いなかったのはデカルト自身である。レギウスには自重を促しながら、彼自身が不用意にヴォエティウスに爆弾を投げつけることとなる。『省察』第2版に付された『ディネ神父への書簡』である。彼は、そこ、すなわち公刊書の一部において、「とあるオランダの大学の総長」への悪罵を羅列する⁽⁹⁾。1月書簡、およびそれに従ったレギウスの答弁の慫慂さをすべて無にする行為であることは言うまでもない。彼における政治性の欠如は明らかであろう。むろん、哲学者に必要な資質ではないが。

また、2月書簡、3月書簡で準備中と述べられている『哲学』とは、『哲学原理』のことである。デカルトは『哲学原理』をこのような闘争のさなかに書いていたのである。

なお、3月書簡、4月書簡訳文の各段落先頭にAM版に従って段落番号を付す。続く数字はAT版第3巻の頁数、行数である。また、各種の括弧の意味するところは以下のとおり。

() ……本文中の括弧

《 》 ……本文中のイタリック

[] ……訳者の補足

1642年2月末書簡 (AT-3: 528-529/AM-5: 153-155)

【1段落のみ】 友人たちから聞いた限り、ヴォエティウスへの君の答弁を読んでそれを高く称賛しない者は誰もいないということだ。さらに、非常に多くの人びとが読んだが、ヴォエティウスを嘲笑しない者はいないし、彼は自分を擁護するのに君たちの〔市の〕行政官たちに頼らなければならないのだから、彼自身が自分の訴訟を諦めていると言わない者はいない [ということも聞いた]。そのうえ、誰もが《実体的形相》を追い払い、我々の哲学の残りすべてがこのように説明されるならば、誰もそれを受け入れないはずはないと公然と言っている [ようだ]。君は、自然学の問題の講義を禁じられたことに悲しむべきではないのであって、僕としては、むしろ私的な教授さえも禁じられて欲しかったくらいだ。というのも、このようなことのすべては君の栄誉に、そして敵の恥辱になるからだ。実際、この僕がもし君の〔市の〕執政官⁽¹⁰⁾の一人であったとして、ヴォエティウスを打ち負かしたいと思っているとしたら、彼の訴訟について君に対しては〔執政官たちが現に〕為しているのと同じことしかないであろう。そして、彼らが心の内に秘めていることを誰が知っていようか。もちろん、ファンデル・ホルク殿が君の味方であることを僕は疑っていないし、君は彼の忠告と指示に正確に従わなければならない。この前僕が君に書いた文書⁽¹¹⁾についてだが、彼がそれを誰かに見せるように望まなくてよかったと思っている。というのも、もし必要があればそこでヴォエティウスに対し約束したことを僕自身で果たすべく、送付前に書き上げていたけれども、しかし、その必要がない方がはるかによいからだ。毎日、あまりに多くのことがあって、僕の『哲学』〔の執筆〕の妨げとなっているが、しかし僕は今年中に完成させる決心をしたのだ。そのほか、君の後援者たちが君に命ずることのすべてを厳密かつ喜んで従うよう、そしてそれが君の名誉を汚すことには何らなりえないと信じていなさい。さらに、君に対する討論は無視し、もしそのうちに何か良いことがあるなら彼らもまたそれを同様に文書にすればよいのであって、自分としては実際文書で出されたものにしか答えることはできないとだけ言っておけばよい。では、また。

1642年3月書簡 (AT-3: 536-542/AM-5: 158-168)

【第1段落 (536: 2-26)】 君が《真理のために迫害を甘受した》⁽¹²⁾ ことを祝福する。祝福すると僕は言っているのであり、それも心からだ。というのも、この騒乱から何か悪しきことが君に生ずるとは思われず、かえって君の名声は大いに高まっているからだ。神が君の敵から思慮と良

識を奪い去ったことを、君は喜ばなければならない。なぜなら、すでに君も知っているように、君の本の禁止がもたらしたことといえば、ただいっそう熱心に求められ、いっそう入念に吟味され、いっそう多くの人びとに彼の不正と君の理由の良さが認められたことだけだったのだから。多くの人びとがすでに、かくも過酷に、かくも不当に、そしてかくも故なく、ただ彼の嫉妬心に掻き立てられて、始めに彼の方が君を挑発したことに気づいている。そしてこれに反して、君といえはかくも慎み深く、かくも穏やかに、またかくも（まったく不相応とはいえ）礼儀正しく答えたのであり、君はかくも正当で重要な理由から答えるべく強いられたのであることを。多くの人びとが、君の意見を攻撃しようと努めている理由のすべてがかくも無力で、これに反して君がそれに反駁している理由がかくも有効であることを認めている。多くの人びとが、彼にはこれ以上君に答弁すべきことが何も残っていないと結論している。そして、公開の文書で君のことを無神論者とか獣とか他の同様な言葉で呼び、そして君に偽なる告発を負わせるべく偽なる理由をあてがうほどに、それほどまでに彼が法と正義に反して君たちの市で権力をもっていることに対し、実に多くの人びとが憤慨するであろう。君といえは実際、自分の嫌疑を晴らすためにこの上なく真なる理由とこの上なく慎み深い言葉を用いることすらまなならないというのに、だ。

【第2段落 (536: 27-538: 21)】 彼の方から提案されたと聞いていること、すなわち、彼自身が高官たちの前で口頭で君と討論し、どちらが優れているか判断してもらってよいということだが、実に素晴らしいことではないか。彼の「提案した」理由といえは、疑いもなく、ある種のスープのように、冷めると不味くってしまうから、今熱いうちに飲み干しておくべきだということであろう。彼はこのことにおいても、他の多くの点と同様我らがスタンピオン⁽¹³⁾に似ているのだ。君がこのような敵を何か恐れるべきとはとうてい思えない。というのも、彼は今後何を仕組むことができるというのか。おそらく、君がいつも教えていることをもはや教えぬよう、行政官に禁じてもらうのか。またおそらく、虚偽や異端のごとく断罪もされるのか。おそらく最後に、最悪の場合だが、君自身から君の教授職が奪われるのか。しかし、君たちの執政官たちが何であれ彼の意に従って決定するほど彼に盲従するとは思えないのだ。それどころか、彼らのうちに、いかなるわけで君の哲学がヴォエティウスや他の多くの君の同僚たちからかくも厳しく咎められているのか、その理由に容易に感づかないひとは誰もいないと思う。すなわち、それは、[君の哲学が] 彼ら「ヴォエティウスたち」の望む以上に真で、あまりに明証的な理由をもっているものだから、彼ら自身の誤った意見を闘おうとすらせずとも追い払い、嘲笑的のとしてしまうからなのだ。というのも、彼らが新しいということを通り越して過誤とみなしているなどということがありえないのは確かだからである。彼ら哲学者たちも新しい意見を毎日のように捻り出し、そのことに至上の榮譽を求め、そして誰もそのことを防げたりはしないのだから。だが、彼ら自身が互いに妬んだりしないのは、つまり彼らが真と信じていないからなのだ。君自身についても、もし彼らが「君の意見を」偽と判断していたならば、妬みはしなかっただろう。だが、いずれにせよ、行政官たちは、これまで彼らが新しく偽なるものを教えるのを妨げなかったのだから、新しく真なるものを教えることをも禁じはしないであろう。そして、[行政官のうちの] 少なからぬ人たちは、かかる学校の些事など国を良く管理することにほとんど役立たないのだからまったく学んだこと

がなく、君の訴えの正しさをわからないかもしれないが、しかしながら、彼らとて、君よりむしろ君の敵たちの証言を信用したりなどしないほどには公平で分別があると確信している。そして、[少なくとも] 一人、V殿⁽¹⁴⁾ は、疑いもなく論争のすべての真理を正しく理解しており、彼の同僚に対し十分な権威をもっていて、君をあらゆる不正から護ってくれるであろう。しかしながら、たとえ事態が変わり、驚くべきほど馬鹿げたことでいかなる前例もないことだが、君が職を奪われることになったとしても、それでも君が嘆くことはいっさいないと思うし、また不名誉はわずかたりとも君ではなく、他の者たちにいつまでも帰されることになるのだ。そして、その場合、[彼らの] 度し難い無知、あるいは真理に対する嫌悪、あるいは君たちの市における滑稽な権力が全世界に知られ渡ることになるのは確かであろう。そして、これまた確かに、もし僕が君の立場であったなら、僕は、自分がどれほど多くの後援者をもっているか、そして、ヴォエティウスに屈するぐらいならむしろ自分から職を辞すということを執政官たちにわからせようとするであろう。そして、君が望むならば、君は他の場所で、いっそう名誉ありいっそう有利な職を短期間でまことに容易に得るであろうことをも、僕は何ら疑ってはいない。そしてじきに、君の市では、君と同じことを教える一人に対し、君の敵たちと同じことを教える者が千人は現れることになろう。しかしながら、その一人こそが学を愛する者たちにいっそう求められることになるのだ。

【第3段落 (538: 22-539: 10)】 僕に関して言えば、僕はこれまで君の後援者たちに恩義を受けていると信じていたのであり、というのも、哲学の意見において君が僕とかけ離れていないことを知っていながら、それでも彼らは快く君を教授に選んでくれたからなのだ。そしてまたおそらく、君の言うところを信じるならば、彼らは特にそのことを理由として選んだという。このことで、僕は彼らにとりわけ恩を感じていた。そして、このことにより、後代の人びとが、君たちの市は我々の哲学を公式に受け入れた最初の町であると誇りにできるよう僕は強く願っていたのであり、[君たちの市が] その名誉を汚すことのないよう望むところであって、もし今、不正なる敵から君の安全を保証しないとしたり、反対に不名誉になってしまうからだ。というのも、君を最初に教授として受け入れた人びとは、君が何か優れたことを含む新しいことをもたらしたなら、それを理解するほどの才知をもたない君の同僚の多くは、ただちに君に多大なる嫉妬を掻き立てられないはずがないことをわかっていたはずだからである。それゆえ、彼らは君をそれから護る覚悟をもっていなければならないはずなのだ。

【第4段落 (539: 11-20)】 実際、彼らにとって難しいことではないだろう。というのも、たとえ中傷によってであれ、いったい君の何を責めることができるというのか。つまり、君が新しいことを教えているということか。誰か才知をまったく欠いているわけではない者たちが新しい意見を捻り出し、それをもって多大な栄誉を求めようとするのが、哲学において実際ありふれたことではないかのようなではないか。だが、つまり、彼ら自身が互いに妬みあわないというのは、彼らが真であると信じていないからなのだ。だから、もし君の意見が偽と思われていたならば、君もまた妬まれはしなかっただろう。だが、他の者たちの新しくはあるが偽なる意見が許されて、君の新しく真なる意見が妨げられるということは、実際公平なことであろうか。

【第5段落 (539: 21-540: 2)】 他に、君がヴォエティウスに逆らって書いたことが大いなる罪として責められている。それは、まさしく、誰か良識ある者が、双方の訴状を読んで、彼の方から始めにことを為したのを知りつつも、この上もなく厳しく君を訴え、中傷で打ち倒そうとしたのが彼自身であったことにはっきりと気づいていないかのようなではないか。君といえば、実際、礼儀正しすぎるほどに、穏やかすぎるほどに答えただけなのであって、それはあたかも、誰かが君を殺そうと剥き出しの剣で追い回し、君といえば、実際、攻撃を逸らすべく素手で払い、この上もなく礼儀正しい言葉で彼の怒りをなだめようとしただけなのに、彼は怒りに激し、君が彼に殺されないようにしていることを非難しているかのようだ。

【第6段落 (540: 3-20)】あるいは、それとも、君を告発しているのはヴォエティウス自身ではなく、他の同僚たちだとも[言うのだろうか]。あたかも、彼らはヴォエティウスの意図でそのようにし、そして君に対する[彼と]同じ妬みに燃えているということが不確かであるかのごとくに。そしてあたかも、それゆえに、君に対し為された攻撃を君がはね返していると告発することが正当であり、そしてむしろ彼が襲撃者ないし誣告者として罰せられるべきことにはならないかのごとくに、だ。僕としては、彼をとりわけ誣告者と呼んでいるのであって、それは、彼が、君は君たちの神学に反するある意見を教えたことの上もなく不当に君を告発したがっていたこと、しかしながら、君の[意見の]すべては通常のものよりいっそう適切に神学に一致していることを知っているからであって、そして、僕が見た無神論に関する彼のテーゼ⁽¹⁵⁾ だけからしても、彼が我々についてむしろ誤って信じたがっていることを確実に明証的な帰結によって示すことは容易であろう。それどころか、彼の価値がいかなるものであるかを描き出し、そして彼の策略のすべてを暴き出す必要があるとしても、[もしそれができれば]彼がかくも長く牧師ないし教授の座を占めていることは君たちの市にとって汚辱であることがおそらく明らかになるであろう。というのも、真理の力は偉大だからだ。

【第7段落 (540: 21-541: 18)】[君を]非難する最後の、そして主要な理由は、言われるところの教授たちの抗争に由来する君たちのアカデミーにとっての損害であろう。だが、まず、かかる私的な抗争が大学に害を与えうるとは僕には思えないのであって、なぜなら、反対に、このようなことによって、各々は他からの批判を恐れて、それだけいっそう注意深く自らの職務を果たすことになるからである。そして、さらに、たとえこのことがこの上もなく大学を害するとしても、抗争を逃れようとしている君よりも、それを作り出した張本人である他の人びとこそが責を負うべきであることは確かである。[彼らとて]君の授業を、学生たちが君たちのアカデミーに通うのを遠ざけるようなものだとは言っていないと思う。というのも、僕は、君が充分多くの聴講者を、それも最も優秀な者たちを得ていると聞いているからだ。そして、このようなことは、君たちのところばかりではなく他のどのような場所でも我々の意見の定めであって、卓越した才知ある人びとに愛され、評価されているのだが、しかし、卑賤な学校教師たちは別であって、彼らは誤った技によってある程度の学識の評判に至ったことを自ら知っており、それゆえに真理が知られてその評判を失うことを恐れ、憎しみを抱くことになるのだ。そして、僕の予感が間違っていないければ、いつの日にか、君一人で君に敵対する者たちすべて以上[の学生たち]を君たち

のアカデミーに受け入れるときが来るであろうと期待している。僕が準備している『哲学』の出版は、おそらくそのことを妨げないであろう。それで、もし君たちの市の支配者たちが自分のアカデミーの利益と栄誉に配慮するならば、彼らは、君一人よりむしろ君の敵たちすべてを追放するだろう。なぜなら、彼らと同じことを教える者を他に千人見つけることの方が、君と同じことを教える一人を見つけることより容易でもあるからだ。

【第8段落 (541: 19-542: 2)】 また、おそらく君たちの執政官たちのうちのある人びとは、国を正しく管理することに必要がないのだから学校の勉強に通じていなくて、君よりも君の敵たちをいっそう信用するのではないかと、僕は恐れていない。というのも、このような嫉妬に気づかないほど彼らの勘が鈍いとは思えないし、そして、たとえ V. R. 殿⁽¹⁶⁾ 一人といえども、彼は、ただちに論争の全体と君の訴えの公正さを疑いもなく正しく見抜き、そしてかかる事柄を完全に理解していて、君をあらゆる不正から護るのに十分なほど、彼の同僚たちに権威をもっているであろうからである。彼は高潔で慎重であり、真理より君の敵を支持する恐れなどないことを、僕は知っている。

【第9段落 (542: 3-8)】 最後に、君がとりわけ喜ぶべきであることは、君の訴えというものは、君のところで判断された後、また全世界の住人たちによっても判断されねばならず、そして、ここでは〔君の〕名誉のみが果たされ、たとえ最初の判断では正義に反して君から〔名誉が〕幾分奪われたとしても、もう一つの〔全世界の〕判断では利子を付けて取り戻される、といったようなものであることである。では、また。

1642年4月書簡 (AT-3: 558-560/AM-5: 186-188)

【第1段落 (558: 2-559: 9)】 ヴォエティウスの餓鬼と言うか子供と言うか、僕としては息子をそう呼びたいのだが、彼の《テーゼ》を読んで笑ってしまったし、君たちのアカデミーの《判決》なるものも子供じみていると言ってもおそらく不当ではないだろう。かくも愚かなものであることを欲しなかったエミリウスとキプリアヌスを褒め称えたい。君についてだが、実際、君がこれほど気に病んでいるように思われることについていらだっている。というのも、君の敵たちが彼らに相応しい武器で自分の首を絞めているのを見ているのだから、君はこの上もなく喜ぶべきなのだ。なぜなら、並の知性をもっているひとなら誰でも、このような文書を読み通せば、君の敵たちは君に反駁する理由も、彼らの無知を覆い隠す智恵をも欠いていることに容易に気づかないはずがないのは確かだからだ。

【第2段落 (559: 10-560: 13)・AT版段落分けなし】 今日、君のヴォエティウスの〔側の〕修道僧が再び答弁を準備していると聞いた。実際、確かであって、というのも出版すべき本屋から聞いたことだからだ。およそ10葉からなるようで、つまりそこにさらにヴォエティウスの《補遺》と君の《註》も一緒にして出版される。僕はこのようなものが書かれることに拍手喝采しているし、君にも喜んで欲しいと思う。君の後援者たちの命令について言えば、彼らに為しうる限り寛大であり賢明なものだと僕には思われるのであって、つまりは君の同僚たちの不平を慰撫するためな

のだ。君としては、もし僕を信じてくれるなら、それについてはこの上もなく厳密に、そしてまた矜持をもって従い、君の医学〔の授業〕をヒポクラテスとガレノス風に教え、他のことは何も教えぬように。もし学生たちの誰かが他のことを君に求めたなら、君としてはまことに穏やかに、自分には許されていないと弁明するように。また、できるだけ個別の事柄を説明しないように気をつけ、実際にそうであるとおり、そのような事柄は互いに関連しあっていて、一つは他なしでは理解されえないと言うように。君がそのような身を処する限り、もし君がこれまで教えてきたことが学ばれるに値し、またそれを学ぶに相応しい学生たちが君にいるならば、君は疑いもなく短期間のうちにもう一度、ユトレヒトであれ他の場所であれ、それを教える機会と権限を、それも倍加した名誉とともに得ことになるであろう。だが、それまでも、君には何ら悪いことは起きてはおらず、それどころか反対に多くの良いことが生じていると僕には思われる。というのは、君の敵たちが静かにしていた場合よりも、誰もが君をはるかに褒め称え、いっそう評価しているからだ。さらに加えて、暇が与えられたのであって、君は教える負担から一部解放されたにもかかわらず、だからといって俸給が減らされたわけではないのだ。これを恭しく受け取る気持ちを別とすれば、いったい何が欠けているというのか。頼むから、静かに笑っていてくれ。君の敵が速やかに懲らしめられないのではないかなどと気に病まぬように。君は黙ってさえいれば最後には勝つ。もし闘いを再開しようとするならば、君は再び運命に身を委ねることになるだろう。では、また。

註

- (1) 拙訳『1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡』、名古屋学院大学論集、Vol. 46, No. 2, 2010, pp. 63-79。
- (2) AT版と略記するのはアダン・タヌリ版全集（“*Œuvres de Descartes*”, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, 12 tomes, Paris, 1897-1913, 1996）。AM版とはアダン・ミロー版書簡集（“*Descartes. Correspondance*”, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 tomes, Paris, 1936-1963）。当該書簡はすべて前者では第3巻、後者では第5巻にあり、それぞれAT-3, AM-5と表示し、その後に:で結んで頁数を示す。
- (3) A. Baillet, “*La vie de Monsieur Descartes*”, 2 toms, Paris. 1691 (Genève, 1970)。以下、その第2巻をBaillet-2と略記し、その後に:で結んで頁数を示す。なお、ここに紹介するバイエの記事は、「レギウスからデカルトへの書簡」としてAT版、AM版にも採録されているが、書簡自体が残っているわけではない。
- (4) 1月書簡第24段落。前註(1)の拙訳p. 75および註(12)参照。
- (5) 以上、Baillet-2: 150-151。AT-3: 525-526/AM-5: 149-150も、「2月2日レギウスよりの書簡」として採録。
- (6) 以上、Baillet-2: 153。AT-3: 527-528/AM-5: 152も「2月17日レギウスよりの書簡」として採録。
- (7) 以上、Baillet-2: 153-154。AT-3: 534-535/AM-5: 156-157も「3月5日レギウスよりの書簡」として採録。
- (8) 以上、Baillet-2: 155-156。AT-3: 557-558/AM-5: 184-185も「3月31日レギウスよりの書簡」として採録。
- (9) たとえばAT-7: 584-5。なお、Desmond. M. Clarke, “*Descartes, A Biography*”, Cambridge, 2006, Ch. 8 (pp. 218-247) 参照。
- (10) 便宜上、Magistratusを「行政官」、Consulを「執政官」と訳し分けておいた。前者から年ごとに後者を選出される。

【翻訳】1642年、デカルトからレギウスに宛てられた3通の書簡

- (11) 2月2日付レギウスからの手紙に対する返書か。本訳稿前文参照。
- (12) 『マタイによる福音書』第5章第10節、山上の説教10に、「義のために迫害される人びとは幸いである」とある。
- (13) スタンビオンはアムステルダムの数学者。彼とウェッセネル青年との間の数学についての有名な賭けに、デカルトも巻き込まれることとなった。Baillet-2: 51-52参照。
- (14) AT版、AM版ともにファンデル・ホルクとする。なお、第8段落にもほぼ同趣旨の文がある。
- (15) AM版によれば、1639年6月22日、29日、7月6日、13日の4度に分けてユトレヒトで討論されたテーゼ。
- (16) 前註(14)参照。